調査本編・木曽川流域

1．調査の背景と目的

【平成10年度の調査結果の概要】

昨年度は、木曽三川流域をケーススタディ地域として上下流交流の現状と課題、これからの方向性について調査を行い、以下のような問題点と課題が抽出された。

上下流交流を進めていく上での問題点

〈交流の内容〉

- 企画がマンネリ化しやすい
- 一過性の取り組みになりやすい
- 地域の特色を出さないと、上流同士で競合してしまう。
- 植樹した木を管理する人手と重労働を支える交流も必要になってくる。

〈交流を担う体制〉

- 上流の負担が大きい。
- 上流・下流それぞれにしっかりした窓口が必要である。
- 流域各自治体の足並みがそろわない。
- プログラム指導の人材が乏しい。
- 人手が不足している
- 宿泊施設等のハード設備に費用がかかる。

〈交流に対する認識〉

- 下流域住民の上流域に対する理解が不足している。
- 下流の市町村にすれば、なぜ上下流交流なのかという認識。緑や水よりも、道路が渋滞の方が身近な課題。したがって上下流交流にも目がいかない。
- 下流域の市民からすれば、特定の上流の自治体に限定して交流する必然性は少ない。
- 行政同士の交流から民間を巻き込んだ交流へと活動が広がりづらい。
- 交流事業に対する地域住民の認識が低い。
- 下流域の住民の意識変革と共に、上流域の住民も下流のニーズに合わせて変化、工夫していく必要がある。
- 下流の人が上流にお金を落とために、下流に対して売れるものは何なのか。物、文化等いろいろなものがあるはず。問題を具体化した所で詰めないと下流とのズレは埋まらない。

課題として

○木曽独自の“水と緑”の魅力を引き出す必要がある。

豊かな自然資源を活用し、さらに独自性を高めていく必要がある。豊かな自然、自然を守ってきた暮らし、自然を活かした生業など複合的な視点から木曽の自然の魅力をアピールしていく必要がある。

○上流の人達も恩恵を得られるプログラムとしていく必要がある。

上下流交流プログラムの魅力を維持・向上し持続していくには、地域の人達の協力が必要である。このため、上下流交流が自分たちの暮らしにどのような恩恵をもたらすのか理解してもらう必要がある。

○広域で魅力を高めていく必要がある。

個々のまちにおいて、地域資源を生かした魅力あるプログラムづくりを進めることも必要だが、一方で、周辺地域と連携して魅力づくりに取り組んだ方が来訪者にとって魅力的な場合もある。

○流域意識を広げる必要がある。

下流住民の流域意識を養うために、下流住民の環境教育・学習のフィールドとしての上流域の活用や、流域環境情報のデータベースづくりが必要である。

【調査の目的】

前年度の調査結果より、木曽川流域の上下流交流における上流側の課題として、以下の事項が挙げられた。

- 広域での協力体制の構築
- 地域住民の参加・協力の充実
- 独自性の高い地域の魅力作り
- 下流側と一体となった流域意識の醸成

これを踏まえ、本年度は上流側の木曽郡をケーススタディ地域として、上流側の広域連携や住民参加による主体形成のあり方に焦点を絞り調査を進めた。

2．木曽の上下流交流の現状

調査を進めるにあたって木曽広域連合や上下流交流に取り組んでいる町村の担当者、地域活動に取り組んでいるキーマンにヒアリング調査を行い、木曽の上下流交流や地域活動の現状把握を行った。

木曽川上流では、木曽広域連合や各町村を中心に上下流交流が取り組まれており、特に上下流交流が進んでいる地域では上流・下流の地域活動同士の交流が行われている事例も見られる。

2－1．行政関係の取り組み

1）木曽広域連合の上下流交流に関する展開

- 「水と緑のフェスティバル'９９ｉｎ木曽」（H11.8.7 年度中）
- 「木曽上下流交流実行委員会の立ち上げ」（H11 年度中）
- その他現状の交流事業の調査・協力、木曽広域の交流事業計画の素案作成

2）木曽郡各町村の上下流交流に関する展開

- 「水源の里体験学習」（南木曽町～中部圏の都市部）
- 「一宮リバーサイドフェスティバル」（木祖村～一宮市）
- 「愛知用水受益市町村植樹」（三岳村、王滝村～下流市町村）
- 「水週間イベント」（木祖村～名古屋市）
- 「第 13 回やぶはら高原マラソン大会」（木祖村～下流域住民）
- 「日進市との学童野球大会」（木祖村～日進市）
- 「'99 サマーキャンプ　IN　KISOGAWA」（木祖村～下流域住民）
- 「水源の森を守るつどい」（三岳村、王滝村～半田市）
- 「子供交流会」（三岳村～三好町）
- 「小学生による交流」（日義村～浜島市）
- 「ちびっ子セミナー」（大桑村～師勝町）
- 「森と水に親しむ会」（三岳村、王滝村～下流域生徒）
- 「愛知用水の水源地と下流受益地との交流会」（三岳村、王滝村～下流市町村）
- 「第 13 回全国日曜画家中部日本大会」（木祖村化～下流域住民）
- 「グリーンカレッジ IN 国民の森」（王滝村～加子母村）
- 「スポーツ交流」（山口村～師勝町）
- 「日進市産業まつり」（木祖村～日進市）
- 「夢の水管理団体交流会」（三岳村～三好町）
- 「下流域市町村での物産展」（王滝村～半田市、東郷町）

２－２．地域活動（キーマン）の取り組み

地域の活性化に取り組んでいる地域活動団体やキーマンとして以下の方々の活動情報が得られた。（※以下、敬称略）

①木祖村

笹川　ふじ子…商工会婦人部、農村マイスター

唐沢　一寛…木祖村役場　総務課長

木祖村と日進市との間で行われている交流事業の推進役。今回行われた木曽川上下流交流事業においても推進役を努めた。

澤頭　修自…村誌編纂室長、自然同好会 代表

永島　芳晃…社会福祉協議会専門員

Ｕターン者で嫁さまの会・ゲットインタッチ等の考案者、インターネットを利用した情報を発信している。

高木　勇…花咲くむらづくりの会 代表、陶芸教室の講師

元中学校教師で三岳村の御岳焼きの考案者でもある。

● **日進市との交流（木祖村）**

- 日進市とは、上下関係ではなく同等の友好関係にある有効自治体提携を結んでいる。商工会は姉妹提携を結んでいる。
- 日進市とのつき合いは、商工会のメンバーが村をなんとかしようとして始まった。
- 以前から、日進市文化協会が交流したいと言っていたが、木祖村には「文化協会」に該当する団体がなく、昨年初めて交流した。

● **名古屋市との交流（木祖村）**

- 日進市・名古屋市合同で小学 4～6 年生対象のサマーキャンプを木祖村で行い、水の大切さを教えている。交流内容は、木祖踊りの披露、人形作り、みずき沢での森林教室、味噌川ダムでの筏作り等を行っている。

● **味噌川ダム交流委員会（木祖村）**

- 木祖村、名古屋市、愛知県、岐阜県、長野県、水源資源開発公団、建設省で構成され、木祖村と下流との将来的な交流をどうするべきかを検討している。

● 商工会婦人部の取組（笹川）

- 日進の自然同好会と交流している。日進市婦人部の副部長が植栽（郷土の森 水木沢）に来た時に木祖村の自然を気に入り、その後同好会のメンバー（60人）を連れてきてもらった。
- 特別なもてなしをしても無理があるので、これまでの日進市との交流活動は、木祖村のありのままの姿を体験してもらうようにしてきた。⇒山菜採り、とうもろこしの種蒔き、収穫、etc
- 村民は農作業を手伝ってもらえるし、相手方は初めての体験だと言って楽しんでもらえた。
- それでも一般の観光客への対応とは異なり、日進市民が来た時は木祖村巡りに同行するなどのもてなしをしてきた。
- 婦人会の任期は1年で、仕事をもっている人が多いので、交流活動はなかなか進まない。
- 役員によって交流活動にムラがあり、積極的な役員の時には活動が盛んになる。
- まちづくりへの貢献としては、景観サポーターの木祖村版を作ろうと考えている。手始めに、違反のビラはがし活動を9月2日に7人で始める。

● 自然同好会（澤頭）

- 平成6年からスタートし、今年で5年目になる。
- 会員は60人で会員の子供も10名程度参加している。
  村民 40人＋村外 20人（日進市2・3人…日進市自然愛好会で商工会を通して参加している、木曽福島・塩尻・松本）
- 水木沢、鳥居峠の探索などを行っている。自分達の足元を知ることが目的で、村の新発見が楽しみ。自然保護が目的ではない。
- 会員には、野鳥の研究家など専門家もおり、子どもたちへのレクチャーもできる。
- 今年9月に、村の事業でアヤメ池（人工の溜池）の公園整備が始まる。自然豊かなみんなが親しめる池とするため同好会案を出している。
- 日進市との文化交流会（10/24）に参加し、木祖村の自然を紹介する予定である。木祖村には文化的サークルが60位あり、半分が活動している。
- 滝など村民の知らない活用されない地域資源が残っている。見つけた地域資源は広報等で村民に知らせている。
- 学校が5日制になったら、子供と親を自然同好会の活動に巻き込んでいきたい。
- 今後は農業体験などもやっていきたい。

● ゲットインタッチ（社会福祉協議会…永島）

- 東京で 18 年間高校の教師をしていた。木祖村に福祉関係の就職先があったので平成 8 年に U ターンしてきた。
- 戻ってきて村の良さを知ると同時に、自分が村のことを全然知らないことにも気づいた。そこで村の魅力を多くの人に知ってもらうため個人的にホームページを開設し、村の紹介を始めた。
- 教師をしていた関係もあり、東京の高校に夏休みの合宿や野外体験を木祖村で行ってはどうかと紹介したこともある。（バレーボール等合宿、野外体験　3 泊 4 日）
- 福祉が老人中心だったので、子供たちに目を向け、小学 3 年～中学 3 年を対象に地域の伝統文化のスペシャリストの養成を始めた。参加することがステータスになる集まり、かっこいい集まりにしたかった。
- 活動内容

  郷土の学習…地域探索、科の木の縄づくり

  ふれいあい体験…70 以上の老人からわら細工、わらじづくり等を伝承してもらう。

  ボランティア…あいさつができる子供の育成

● すずめ塾（社会福祉協議会…永島）

- 高齢者の生きがい対策としてすずめ塾を開講した。（12 名）
- わら細工（わらじ、10、11 月にはしめかざり）を作り、注文があれば販売している。妻籠宿や銀座で売られている。
- 売り上げで年 1 回温泉旅行に行く。
- ゲットインタッチの講師をしてもらう。

● 嫁さまの会（社会福祉協議会…永島）

- 他県から来たお嫁さんの懇親会で、年一回開催している。（24 人）

● 結婚イベント（社会福祉協議会…永島）

- 木祖村には男女の出会いの場がなかったし、村の結婚相談担当者は 70、80 歳代の老人なので、若い人の考え方とずれがある。木曽郡はどこも同じ状況。
- これまで木曽郡の他の町村でも嫁の募集はあったが、真剣な場ではなかった。
- 田舎に暮らしたい、農業体験をしたい独身女性を中日新聞、田舎暮らしの本等で募集した。
- 21 名から問い合わせがあり、5 名が参加することになった。
- これまでは都会から来ていただくということで全額負担でもてなしたが、本来は都会と田舎双方に恩恵があるイベントなので参加者からも参加費・交通費とることにした。

- 村内へのイベントPRは、嫁さまの会にお願いした。
- 8月10～13日で開催されたイベントの内容は、
  御岳白菜の収穫体験
  木曽の観光
  見合いパーティー（木祖村男性10人参加）
- 嫁さまの会が夕食会を開き参加女性と意見交換を行った。嫁さまの会からは、木祖村に嫁に来た感想を本音で語ってもらった。
- 1町村では金銭的にも支えきれないし女性も集まらないので、月1回、各町村持ち回りでできないかと木曽郡にもちかけたが反応はにぶい。年1回で木曽全体の大イベントにしても良い。

● 花壇づくり（自治会…高木）

- 長寿社会開発センター（老人大学を卒業した方々が県から委嘱される）で花づくりを研究してきた。
- 平成元年にリバーサイドパークの施設整備が行われ、歩道が整備された。歩道整備の一環として7グループ集まって、平成5年に「花咲く村づくり会」が発足した。
- 自治会で村に貢献できる活動として花壇づくりを始めた。年3回活動し、7年目になる。管理も自治会が行っている。
- 一年を通して花が見られる花垣づくりに取り組んでいる。
- 村境の峠まで花壇を作りたい。例えば奈川村が県道上高地ゆうゆうラインに街路樹を植えているので、木曽村側も村境まで花壇つくるとか。
- オミナエシ、オキナグサ、ミソガワソウ など木曽らしい花も増やしている。

● 焼き物づくり（高木）

- 三岳村で御岳焼を開発した。木祖村でも開発したい。
- 村内で産出される土（マンガン、長石、けい石）や石でおもしろい材料がとれる。
  木炭と長石、火山灰と長石、ステンレスと長石などを実験している。
- 公民館活動で年12回陶芸教室（昼25人、夜25人）を開催しており、作品は村の文化祭に出品している。

②王滝村ヒアリング結果

高山　修…フォレストパル王滝塾長（山村留学）
大家　幸雄…公民館長
下出　さち子…和太鼓演奏グループのリーダー

● **東郷町との交流（王滝村）**
- 物産展を開催している。イベント時には、下流に雪を持って行く。

● **王探クラブ（王滝村）**
- ふるさとを知ってもらう活動として開催している。
- 子供育成会が主催し、年間で 12 回開催している。（30 人位参加）

●**オーストラリアとの海外交流（王滝村）**
- 小中学生が毎年数名オーストラリアに行っている。

●**どんぐりの商品開発（王滝村）**
- 山村歴史文化会館（村営）の郷土食コーナーでどんぐり食品を販売している。
- 瀬戸さん（婦人部）が中心に開発を行っていて、「森の市」（林野庁）にも出品している。
- 王滝村土産として主力商品にしたい。

●**姉妹校交流（公民館…大家）**
- 昭和 38 年から御前崎の小中学校と姉妹校の交流を続けている。
- 御前崎とは、友好町村でＰＴＡの交流から生徒間の交流へと発展した。
- 最初は王滝村の生徒が御前崎の海へ行っていた。最近はスキーに来てもらう。
- 来年はサッカー交流で 1,000 名連れてくる予定。今年は 700 名来てくれた。

●**山村交流（王滝村フォレストパル…高山）**
- 王滝村の子供たちの教育のために山村交流を行っている。
- 生徒の募集先は、水のつながりを活かして下流自治体をねらってきた。水公団の受益地である 24 町に生徒募集のＰＲをしている。
- 長期交流（１年以上滞在）と短期交流（週末、夏休み、冬休みを利用）を行っている。

- 長期交流

  内容：王滝小中学校に通いながら共同生活を営む。森林活動、農作業、スポーツ、芸術活動を行う。

  対象年齢：小学校3年生から中学校3年生まで。

  費用：一時金10万円、生活費7万8千円（1ヶ月）、学校関係8千円（1ヶ月）程度。

- 短期交流

  内容：春スキー、イワナ釣り、農作業、山菜採り、植樹体験、森林体験、村の祭り体験、スポーツ等。

  対象年齢：小学校3年生から成人まで。

  費用：一泊5千円（交通費別）。

- 3年前に23人でスタートし、現在は37人の生徒がいる。
- 村の子供、都会の子供に自然の中で生きる力をつけてほしいので、山の管理作業（下草刈りなど）もさせている。
- 生徒は村民運動会など村のイベントにも参加し、村民との交流も図っている。都会の生活で失われがちな協調性を養いたい。
- 卒業後、木曽山林高校に通う子も出てきた。大抵の子供が卒業後も村に遊びに来ており、王滝村が第二のふるさととなっている。
- 子供がいるので親も遊びに来るようになり、親同士の交流も生まれここに住みついた人もいる。
- 他の市町村の山村留学は生徒数の数合せでやっているので感心しない。

●和太鼓演奏（下出）

- 10年前に村の元気づくりで太鼓が流行したときに発足し、3年前に本格的に活動を再開した。
- 女性だけの和太鼓のサークル。（14名）

- 月1回位演奏依頼があり、村のイベント等で演奏している。

（敬老会、お祭り、公民館の催し、三岳村、林野庁イベント（森の市）、半田市のだし祭り）

- 木曽郡は全町村に太鼓のグループがあり、「木曽郡太鼓フェスティバル」が開催されるので、王滝村代表として参加している。

●ひまわりマーケット（下出）

- 農産物、木工品のフリーマーケットで、客層は主に村民。

●「すんき」の商品開発（下出）

- 農家のおばさんの集まりで、商品の売り込みはこれから。

③上松町

田上　洋介…上松町教育委員会　社会教育係長

公民館活動を通して地域おこし、青少年の育成に尽力している。現在、「水」「健康」「癒し」をテーマに様々な取り組みをしている。

●中学校郷土芸能クラブ（田上）

- 昭和61年に結成され、今年で11年目。笛、太鼓そして獅子舞いや芝居を身につけ、町の芸能発表の場（年3回位）で披露する。

●リフレッシュビレッジ構想の企画（田上）

- 赤沢自然休養林があることを活かし、下流の人がいやされる場所を上松町につくることを企画した。いやしの里で作業して元気になる

④開田村

大目 富美雄…開田村役場　総務課

「とにかく何でもやってみよう」があいことばの、開田村の地域おこし、交流活動の中心者。

●がったぼ会（森のクラブ…大目）

- 平成元年に「がったぼ会」（森のクラブ）ができた。現在メンバーは25人位（女性が4名）で、年令は20～60歳代と幅広い。半分近くは中京・関西方面からのＩターン者。職業は公務員、自営、ペンション経営、木工職人、しいたけ栽培等、幅広い。
- 「森のクラブ」の補助金を3年間もらい、森林整備の備品（のこぎり、チェーンソー）を買った。
- がったぼ会と観光協会（開発課の観光担当）が、毎年一緒に御岳登山道を整備している。
- 村内や郡内の身近にいるおじちゃん、おばあちゃんから木曽の話を聞く。
- わら馬作り、ワイン、シイタケ作りの講習会を開催している。
- その他の講習会として、外務省の講師派遣事業（無料で来てくれる）を利用し、木曽馬の故郷のモンゴルに詳しい方を派遣してもらい、話を伺った。
- がったぼ会は村民を対象とした集まりなので、折り込み広告でお知らせして参加希望者を募っている。

- 村内の交流事業として、保育園の節分やソリづくりへの参加、中学校の文化祭への参加などを行っている。
- 開田村のＰＲ活動の一環として、高原野菜（大根、白菜がメイン）を名古屋のダイエー等で販売したが、ほとんど儲けはなかった。
- 現在、補助金は受けていないが、認知されている団体なので、公民館や研修センター、マイクロバスを無料で借りられる。
- がったぼ結婚式をしたい。木曽馬に乗る結婚式で、無償で地元の研修センターを使う。料理は地元の素材を使ったもの、引出物は地元の木工等地元のもので全てをまかなう。好評だったら、村外にもＰＲする。
- 魅力ある農村づくりや林業、森林に関わることで、農協から補助金 30 万円がもらえるかもしれない。補助金がもらえたら、がったぼ会で道路沿いの法面にドウダンツツジを植栽するなど景観づくり、まちの魅力づくりをしたい。
- 道路沿いの植栽もコスモスでなく地元の山野草を植えたい。地元の老人クラブでは既に始めていて、オミナエシを植えている。

● 他町村との交流（開田村）

- よその町村では、ダムを通しての下流域との交流が活発だが、開田村には上下流交流実績はあまりない。現在取り組んでいる交流活動は、東京墨田区の立川２丁目町内会と友好協力協定をしている。災害時に相互に非難できる。

● ふるさと交流会（開田村）

- 今年は 9 月 14 日に大阪で「ふるさと交流会」を開催する（今年で 3 回目）。去年は開田村の特産品だけでは物品が充実しないので、木曽郡の特産品を持ち込んだ。

● 景観保全（開田村）

- まちの乱開発が危惧され始めた 1972 年に「開発基本条例」ができた。
- 最初は別荘の分譲地だけが対象だったが、後に、あちこち開発されはじめ、村民に影響がでない範囲で農業振興地域も対象とした。

- 専門家（大学の先生）が来て、看板等の好ましくないものを指摘すると説得力がある。景観保全については観光資源保護財団の報告書の影響が大きい。

● ふるさとふれあい事業（開田村）

- 地元の人、帰省客、観光客に参加してもらい、交流する場をつくっている。（イワナのつかみどり等）
- 広報誌「広報かいだ」の無料配布（年 6 回発行）
  開田出身者の希望者へ
  別荘分譲地の所有者へ管理センターを通して
  郡内の主な公共施設へ

● フォトコンテスト（開田村）

- 毎年開催し、10年以上続いている。風景だけでなく、開田高原の観光PRに繋がるものが対象とされる。
- 応募者は、中京・関西の人が多い。絵画グループやカメラマンの来訪が多い。

● ふるさと大使（開田村）

- 開田高原のPR
- 人材ネットワークづくり

● がったぼ会以外の民間活動

- Ｉターンの人たちが中心となって「おやま文庫」を開き、図書館のない地域の子供たちへ、本の読み聞かせをしている。（週１回、土曜日）
- 青年会の主導のもと、青年会・青年会ＯＢ・子供たちで「若駒太鼓」を演奏している。
- 青年会でそばと桧の箸をセットにした「ふるさと小包」を販売している。好評で、年末には1,500ケースくらい注文がある。

● 地域作りネットワーク（県、郡）

- 木祖郡内の交流組織。既存の講習会の時に、町村間でインストラクターとして呼んだり呼ばれたりすることはたくさんある。

⑤大桑村

家才子　明一…大桑村教育委員会　教育長

河原砂漠と化した木曽川に清流をとり戻そうと運動に取り組む。その動きは郡下に広がり、現在の維持流量（約 2.7ｔ／秒）確保が実現した。その他、青少年育成、村おこし等多岐にわたる活動をしている。

●愛知県師勝町との交流（大桑村）

- 今年で 16 年目。
- 子供たち（大桑村 20 名、師勝町 20 名）が夏休みにキャンプを通して交流する。
- 師勝町は、昔から木曽川からの恩恵が大きい。
- 師勝町は、町民が大桑村で宿泊する場合、宿泊費の補助を行っている。
- 師勝町が大桑村との交流を望んだ理由は、
  地理的な要因…100 ㎞ぐらいの範囲
  大桑村の経済力指数…つき合いを長くするために、経済力指数が高い町が良かった。
  地域資源…阿寺渓谷、高原のキャンプ場の有無
- 老人クラブの交流があるが、積極的ではない。（交通手段に問題がある）
- 文化協会の交流は、当初は活発だったが、現在は行き詰まっている。

●川の流量維持（家才子）

- 高度経済成長時は、「人、山、木、水」の全てがとられてしまった。これでは“ふるさと”とは呼べない。
- 地域住民に向かって、“木曽川に水がない”とチラシを作って配った。たまたま水利権の更新期と重なり、水資源対策会議が関電に対して水を流すよう要求していたので、お互いをバックアップする形となり、平成 2 年に合意した。

●木材、木工業の後継者不足で「Ｉターン政策」

- 村営住宅近辺に土地を用意し、家を建てられるように一年の借地代を 170 円／㎡にする支援を行った。その結果 20 区画全てがいっぱいになった。

●美しくする会（自治会）

- 田んぼ作りを行っている。今年で 2 年目。端午の節句に「田の祭り」で“田の神様”を奉り、小学生をよんで田植えをする。
- 須原宿の水船を保存する。宿場町の風情を残すため共同で維持管理して守る。現在も西瓜、ビールを冷やしたりする。

⑥南木曽町

桜井　親一…南木曽町役場　農林課、南木曽町林研クラブ事務局

林研クラブは、山作り、木材活用に力を注ぐ若手林業者の集まりで、各種イベントの実施、人づくりなど多岐にわたる活動をしている。

● 林研クラブ（桜井）

- 昭和 52 年に設立され、会員 22 名、会費 1 万円／年で運営している。
- 南木曽町から 30 万円／年、市民組合から 5 万円／年の助成がある。
- 県の林務で進めていた後継者育成事業が林研クラブ設立のきっかけとなった。自分たちの山は自分たちで手を入れ、お互いの山の手入れを助け合う。
- 昭和 60 年の村おこしブームの際に、「炭良いまちづくり」（南木曽木炭）、「星しいたけ」のネーミングで炭としいたけを販売した。
- 嫁不足対策として、「中京女子短大」と交流した。
- 「水源の里体験実習」を年 1 回開催している。（9 回目、8 年前から活動）
  - 町有林の枝打ち、下草刈り、除伐

    町外から 40 名が参加する。

    ⇒ 募集方法…ダイレクトメール（過去に参加した人へ）、中日新聞、東海ラジオ

    ⇒ 参加費用徴収

    ⇒ 過去に参加して人が、友人や親戚、家族を連れてきたりする。

魅力は、名古屋から日帰りで来れる立地で、山での作業や食事ができ、桧のコッパ（トランク一杯に持ち帰る）をもらえることなどが喜ばれている。今後は山菜、しいたけ、なめこの収穫も考えている。

将来的には宿泊施設もほしい。上げ膳据え膳でなくとも宿泊施設だけ斡旋してくれればいいという声もある。

南木曽を知ってもらうために桧ガサ作り、和紙すき体験、博物館めぐり等やったが、中にはもっと仕事（林業体験）をやりたかったという人もいる。

活動趣旨に賛同し寄付金をくれる人もいる。…毎年 30 万円（今年で 6 回目、計 160 万円）

- 学校分収林での林業体験を通して、森林資源についての理解を深める（中学生対象）
- シイタケの植菌（中 1 を対象）
- ミツバツツジ（町花）の 19 号線への緑化活動
- 企画はマンネリ化しているかも知れないが、基本的に「山の仕事をする」がメインにある。

- 「人間未塾」という学集会を年１回開催している。
  - 林業に関わる問題だけでなく、いろいろな人の話を聞く。
  - 会員だけでなく地域の方々にも開放していて、広報・無線で呼びかけている。
- 荒廃したやせ山を、もう一度緑豊かな山につくり変えるために、広葉樹を育て腐葉土をつくっている。
- 林研クラブの活動の中で、金銭的なメリットを考えたことはないが、会員の中では個人的に製材屋、建築屋等もいるので、客になれば良いという面はあってもいい。
- 木曽 11 町村の中では、木祖村、上松町、王滝村、大桑村、開田村（がったぼ会）に林研クラブ（又は該当する団体）がある。「林業研究クラブ連絡協議会（県）」で意見交換が行われる。
- 木曽広域連合が主催した「水と緑のフェスティバル」（8 月 7 日）では、住民同士の交流の話ができると思っていたが、結果としては行政サイドの交流の形式になってしまった。林研クラブの主旨とは異なるため、フェスティバル当日の午前中は、下流住民と下草刈り体験を行い、午後からフェスティバルに参加した。下草刈り体験は、木曽の林研グループ、各町村の林務担当、下流住民等 60 名が参加した。森林体験は情報提供すれば人が集まるので潜在的なニーズはある。

●ＷＣＮ（ウッディ・クリエイト・ナギソ）

- 木製連、建築業界、林業・製材業の二代目をまとめて作った組織。
- 小学校に木製のベンチを寄贈したり、阪神大震災の時、神戸長田区へ復興用の木材を寄附（トラック 10 台分）した。
- 支援がきっかけとなって、長田区北部のまちづくり協議会の方と交流している。

3．木曽川における上下流交流の課題

ヒアリング調査結果より、地域レベル、広域レベル、流域レベルそれぞれにおける上下流交流の課題を以下の様にとらえた。

＜地域レベルでは＞

○ 現在各町村で取り組まれている上下流交流は、行政主体で行われている。今後、上下流交流の魅力を高め、持続的なものとするためには活動主体に地域住民の参加を促していく必要がある。

○ 各町村には、観光振興、特産品作り、地域改善や地域再発見などの形で地域活性化に取り組むキーマンがいる。個々のキーマンの取り組みは、独立して行われていることが多く、活動ノウハウの交換や作業協力を円滑なものとしていくことで、地域活動をさらに元気で魅力的なものできる可能性があり、そうした地域のつながりが上下流交流を行政だけでなく地域で支える体制につながっていく。

＜広域レベルでは＞

○ 木曽広域連合のコーディネートにより、下流自治体からの窓口や行政職員の広域連携の体制は整いつつある。一方で、広域レベルにおいても交流事業への地域住民や地域活動団体の参加による、交流の地域住民への広がりが求められている。

○ 郡内の各町村のキーマンには、同じような視点から活動に取り組んでいるケースが多くみられる。またアイディアレベルでは町村を超えた連携により、相互補完により魅力を高めた体制で下流と交流したいとする意識は見られる。しかし、広域レベルでの情報交換の場が少ないためお互いの活動内容すら知らないケースが多い。

＜流域レベルでは＞

○ 上流住民においても上下流交流や流域が認識されていない状況である。また各町村で植樹イベント等の活動行われているが、まだ行政主導の段階であり、下流住民や下流のＮＰＯが上流の森を主体的に支えていく体制にはなっていない。

○ 日進市と木祖村の上下流交流を見ると、行政の上下流交流をきっかけにして、上流・下流それぞれの地域活動団体がお互いの活動パートナーを見つけようとする動きが見られる。こうした草の根レベルの結び付きの強まりが上下流交を支える基盤となりそうである。

4．木曽川の上下流交流を進めていく上での視点整理

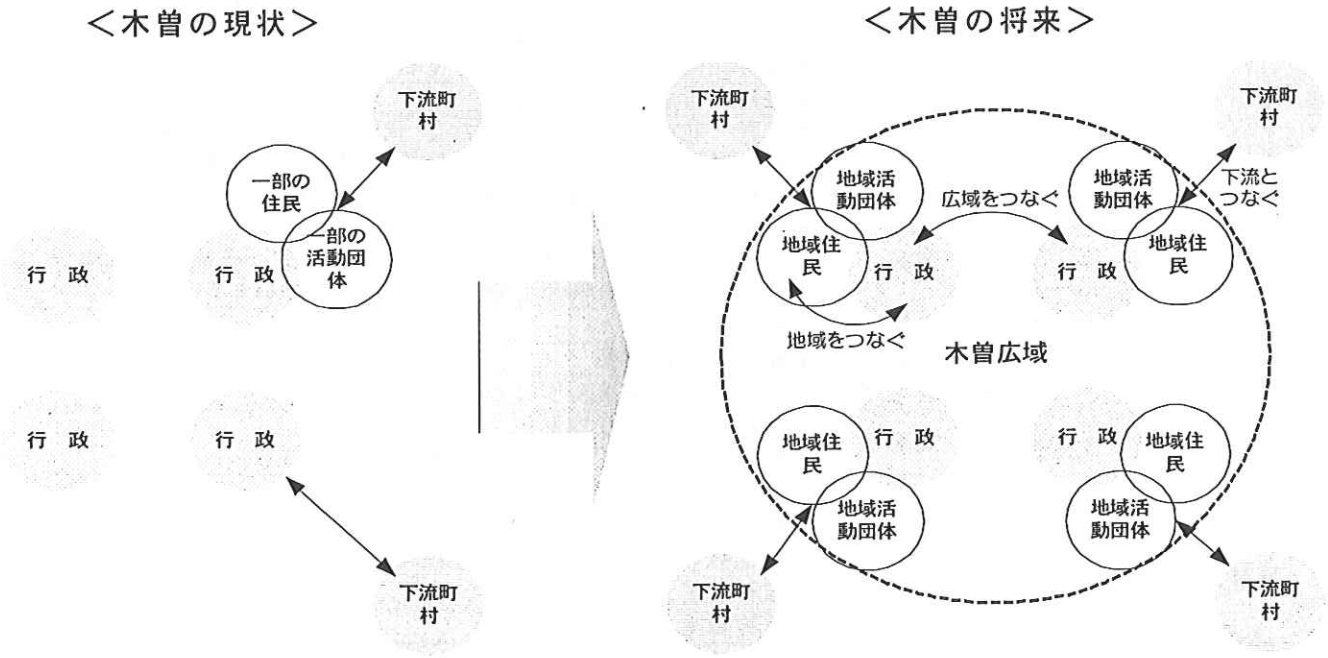
木曽郡の上下流交流の現状は以下のように整理される。

- 各町村内での上下流交流に対する地域住民の理解度にはばらつきがあり、必ずしも上下流交流が必要とは認識されていない。（地域活動に取り組んでいるキーマンであっても、上下流交流そのものを認識していない場合もある）

- 地域住民、地域活動レベルでは、「木曽が一丸となって上下流交流に取り組む」という広域連携の認識には至っていない。

このように行政と地域住民・地域活動団体の間で、上下流交流に対する認識に大きな乖離があるため、いきなり上下流交流の議論を始めても、自らを活動主体ととらえた議論が難しく、交流主体のあいまいな（もしくは行政まかせの）あるべき論的な話になってしまうことが危惧された。このため、キーマンによる地域活動、自治会の取り組みなど地域レベルでの活性化の活動を含めて議論を深め、足元の活動から上下流交流ににつなげていく議論のプロセスを提案した。

このため、「足元から流域につなげていく」ことをねらいとし、“地域と広域をつなぐ”“広域と下流をつなぐ”の二つの視点から、地域住民、地域活動、行政の多様な主体で上下流交流を支える仕組みのあり方について検証を進めた。



5．上下流交流の議論の進め方

調査を進めるに当たり、「木曽上下流交流懇談会」を設置し、計７回の懇談会を開催した。懇談会は、木曽郡で地域の活性化や観光振興、交流活動に取り組んでいるキーマン、上下流交流に取り組んでいる町村の担当者、木曽広域連合の交流担当者からなるメンバーで構成されている。

懇談会を開催した背景には、地域住民が参加した交流検討の場を設ける事で、地域住民と行政のパートナーシップ型の交流主体の形成に向けた第一歩となることを期待した。

■懇談会メンバー

	名　前	所属・活動等
地域活動キーマン	大目　富美雄	開田村　がったぼ会 「とにかく何でもやってみよう」があいことばの、開田村の地域おこし、交流活動の中心者。
	桜井　親一	南木曽町　南木曽町林研クラブ事務局 林研クラブは、山作り、木材活用に力を注ぐ若手林業者の集まりで、各種イベントの実施、人づくりなど多岐にわたる活動をしている。
	田上　洋介	上松町教育委員会 社会教育係長 公民館活動を通して地域おこし、青少年の育成に尽力している。現在、「水」「健康」「癒し」をテーマに様々な取り組みをしている。
	田口　直幸	木曽交流創造塾　副代表
	塚本　恵介	木曽交流創造塾　世話人
	家才子　明一	大桑村　美しくする会 河原砂漠と化した木曽川に清流をとり戻そうと運動に取り組む。その動きは郡下に広がり、現在の維持流量（約2.7ｔ／秒）確保が実現した。その他、青少年育成、村おこし等多岐にわたる活動をしている。
	笹川　ふじ子	木祖村　商工会婦人部、農村マイスター
	澤頭　修自	木祖村　自然同好会 代表
	高木　　勇	木祖村　花咲くむらづくりの会 代表、陶芸教室の講師 元中学校教師で三岳村の御岳焼きの考案者でもある。
	田中　静雄	木祖村　商工会　商工会員で日進市との商工会交流の発起人
	永島　芳晃	木祖村　社会福祉協議会専門員 Ｕターン者で嫁さまの会・ゲットインタッチ等の考案者、インターネットを利用した情報を発信している。
	武居　孝男	木祖村たつの会
	大家　幸雄	王滝村　公民館長
	下出　さち子	王滝村　和太鼓演奏グループ
	瀬戸　美恵子	王滝村　どんぐり商品開発 婦人部でどんぐり商品の開発を行っている。
	高山　　修	フォレストパル王滝塾長（山村交流）
町村交流担当者	唐沢　一寛	木祖村役場 総務課長 木祖村と日進市との間で行われている交流事業の推進役。
	渡辺　　孝	木祖村役場　総務課
	大家　　親	王滝村役場　企画広報係
木曽広域連合	村田　広司	木曽広域連合　企画振興課

調査フローのとおり、懇談会を開催した。

平成11年度調査フロー

平成10年度調査結果
木曽三川流域を対象に、上下流交流の現状と課題、これからの方向性について調査を行った。
- 行政の交流
- 民間の交流

平成11年度調査
木曽郡を対象に、地域住民、地域活動、行政の多様な主体で上下流交流を支えるしくみのあり方を検証する。
- 地域と広域をつなぐ
- 広域と下流をつなぐ

木曽郡の情報収集（資料・ヒアリング調査）
木曽郡の実態把握
- 木曽郡11町村の概況整理
- 地域住民から見た地域活性化や上下流交流への期待（木曽郡キーマンへのヒアリング）

↓

懇談会メンバーの抽出
（交流団体、町村交流担当者、木曽広域連合）
- 地域改善や地域再発見、観光振興、上下流交流に関する地域活動に取り組んでいるメンバー
- 上下流交流に取り組んでいる町村、広域連合の職員

↓

木曽川上下流交流懇談会の開催

第１回懇談会
＜地域活動の情報を交換し、お互いの状況を認識し合う＞
- 地域活動の紹介
- 地域活動に取り組む着眼点
- 地域活動を魅力的なものとするための活動ヒント

↓

第２回懇談会
＜それぞれの立場から広域連携の必要性を議論する＞
- 個々の地域活動をより魅力的なものとするために広域で連携していく必要があるのではないか？
- 広域連携によって上下流交流、都市農村交流、観光振興の活性化が図れるのではないか？
- 地域ごとの活動についても広域的な視点を持つ必要があるのではないか？

↓

第３回懇談会
＜地域～広域～上下流がつながっていることの認識を共有する＞
テーマ…地域の活動、広域的な活動、外との交流はつながるのではないか
- 地域の活動の良さを共有しながら、より連携していくには？
- 行政に頼らずに何ができるか？

↓

第４回懇談会
＜地域連携、広域連携、上下流交流に向けた具体的な展開方針を議論する＞
テーマ…これまでの議論を具体行動につなげていくには
- 美しい木曽をつくるアクションプラン
- 地域資源を活かし、交流を広げ深めるアクションプラン

↓

木祖村懇談会（２回開催）
＜懇談会で出された展開方針について、木祖村ではどう進めるか詳細を検討する＞
- 地域資源を活かし、交流を広げ深めるアクションプランの検討

↓

第５回懇談会
＜木曽郡で上下流交流を進めていく視点を整理する＞
テーマ…木曽独自の魅力を広域で高め、流域意識を広げていく
- 木曽郡全体で交流を支えるしくみ
- 地域の活動をつなぐしくみ
- 広域的な活動をつなぐしくみ

↓

調査のまとめ

５－１．第１回懇談会

議論のポイント１…地域活動の情報を交換し、お互いの状況を認識し合う

各町村内では、地域活動同士の交流も行われているが、木曽広域レベルではお互いの地域活動について情報交換する場がなかった。このため、広域レベルの地域活動情報交換会として参加メンバーからそれぞれの活動に取り組む着眼点、活動を魅力的なものとするためのアイディアやヒントなどを紹介してもらった。

情報交換を通じて、木曽郡でどのような地域活性化が取り組まれているのか認識を共有し、定期的な情報交換の必要性が確認された。またそれぞれの活動紹介から、広域連携を進める際のヒントや地域活動を今以上に魅力あるものとするために共有できそうなノウハウが得られた。

＜懇談会メモ＞

陶芸（御岳焼）（木祖村・高木さん）

- 御嶽山の火山灰と三岳村から採れた粘土が陶芸に適していた。
  ⇒ 御岳焼のための施設 ⇒ 村おこしになる

木曽物産協同組合（塚本さん）

- 地域おこし、モノづくりで何かいい手段はないか？ということでできた組合。
- 木曽のもの以外は使わない。木曽の農産物、地域にあったものをどうやってお土産に結びつけていくか。
- 売上の１％は木曽物産へ（2～300万円／１年）⇒ 新商品を開発するため。
- どんな商品が売れているかよく理解できる。
- 来訪者に、土産を通して木曽の良さを知ってもらいたい。「木曽の特産物で木曽らしさを売ろう」がキャッチフレーズ。

木曽馬結婚式（開田村・大目さん）

- 馬に乗って式場へ行く、地元の公共施設の利用、特産品を引出物に開田高原の目玉として考えている。

木祖村⇔日進市（木祖村・田中さん）

- 日進市には木祖村にないものがたくさんある。（人、物、情報、経済基盤、学校、職場）
- いずれ対等につきあえるようにしていきたい。人間的には対等な関係で付き合っている。

フォレストパル王滝塾（王滝村・高山さん）

- 将来を担う子供をどう育てるかが課題。少なくなってしまった子供達にどう力をつけるか。交流を通して木曽を知ってもらう。
- 山村留学で交流をさせながら地元の学校の子供達もそれなりの授業ができる人数を保つ。⇒ 過疎化対策も含む。
- イベント（魚つかみ、下草刈り等）に参加して、自然に対する意識を高める ⇒ 木曽を理解してくれる人間がまちに増えてくることが大事。

大桑村⇔師勝町との交流（大桑村・田口さん）

- 師勝町と交流がある関係で、毎年「ちびっこセミナー」を開催。⇒ 山のキャンプ場へ行く、等

和太鼓（大桑村・田口さん）

- 子供達の和太鼓…年間 12～3 回演奏に呼ばれる。

⇒ 毎年 8 月に愛知県の「たこ祭り」に呼ばれて演奏している。

⇒ 長野県松代町の子供の太鼓チームに来てもらってコンサートを開いた。機会があれば木曽川の交流もして行きたい。

- 行政主体で、民間がついていくという形になっている。それはそれでいいが、今一つ我々のやりたいものができない。

赤沢自然休養林の活用（上松町・田上さん）

- 子供を赤沢自然休養林で遊ばせる企画…10 年目／7 回実施。自分達の地域性に自身が持てない子供多いが、「世界に誇る赤沢で遊んだ」、「地域にそういうものがある」という位置付けをしてあげる。
- 活性化のキーワード「自然・健康・安心」をどのように提供してくのかが大事。
- 「食べ物も作る物も本物」…木の文化に則したものを提供していくというベースが必要。本物であればわかってもらえる。

上下流の文化を探る（上松町・田上さん）

- 赤沢自然林を伊勢神宮、熱田神宮へ持っていくという何百年もの歴史がある。そういった所と木曽圏域の精神的な文化の交流、エネルギーのを使えるような文化交流ができたらと思う。
- 木曽節の成り立ちには三河文化が関わっている。下流の人にアレンジしてもらった。
- ひよ…木を流す人、そま…木を切る人

結婚イベント（木祖村・永島さん）

- 田舎に暮らしたいという志向が強くなってきている。
- 広域連合も出来たので、１町村でやるのではなく、木曽郡みんな一緒でやったほうがいいのではないか。
- 農村と都会がが対等の関係。
- Ｕターンして感じることは、どこの町村もＰＲがヘタ。都会の人も、木曽の人も知らないようないい所がたくさんあるので、もっと上手にＰＲしていければと思う。
- ＰＲにもお金がかかるので、一町村では賄いきれない。

広域的（木曽郡域）な視点を持った活動

ゲット・イン・タッチ、すずめ塾（木祖村・永島さん）

- 子供にもお年寄りにも活動できる場を提供するのが仕事。
- ゲット・イン・タッチの活動内容
  ⇒ 「すずめ塾」のお年寄りからワラ細工を伝承してもらう。
- すずめ塾活動内容
  ⇒ 高齢者の生きがい対策として、ワラ細工を作り販売する。

上松中学校 郷土芸能クラブ（上松町・田上さん）

- 祭りという文化を大事にしたい。
- 赤沢の子供達と同じように、自分の生まれ育った地域を自信をもって言うことができるようになる。
  ⇒ 都会に出ていっても、都会から帰ってきても、木曽の良さをわかってくれる。

昆虫調査（塚本さん）

- 木曽川が一番自然が残されていない。
- 上流の自然を守るデータやしくみを作っていかなければ。
- 今後、開発をしていく中で、考えていくべきこと
  ⇒ 木曽郡全体の動植物の調査が必要。
  ⇒ 現地調査には、学識経験者が必要。ナガイ シンジ先生が木曽にいる。
  ⇒ 周辺の先生が来て、いろんなデータが蓄積されていく ⇒ 集約する組織が必要 ⇒ 集約した上で何を残すか、開発すべきか検討
- 営林署…自然博物館
- イベントなどで一度造った物を次にまた使えるように。

まちごとの活動

花咲く村づくりの会（木祖村・高木さん）

- リバーサイドパーク
  - ⇒ 長寿社会開発センター、婦人会、商工会、自治会、木祖村の緑の少年団、老人クラブの人達と一緒に県道の花壇に花を植える。
  - ⇒ 上高地奈川村との連携を深めながら県道上高地ゆうゆうラインの整備
- 景観形成住民協定（菅地区）
  - ⇒ 来年度から花壇を増やす予定。自然同好会とも連携をとりながら、味噌川上流に咲く花“ミソガワソウ”や“オキナグサ”も植えていく。

がったぼ会（開田村・大目さん）

- 自由に何でもできる活動。保育園の園児との交流、お年寄りに山菜を届ける、登山道の整備。
- 「がったぼ塾」…地元のお年寄りをよんで昔話、木曽の話、ワラ馬の作り方、フィリピン料理、ワインを味わう会
- 交流を深める中で出てきたアイディアを具体的に実現していく。楽しくなければ長続きしない ⇒ あまり「活性化」「村おこし」「まちづくり」を意識しないで気楽に取り組む

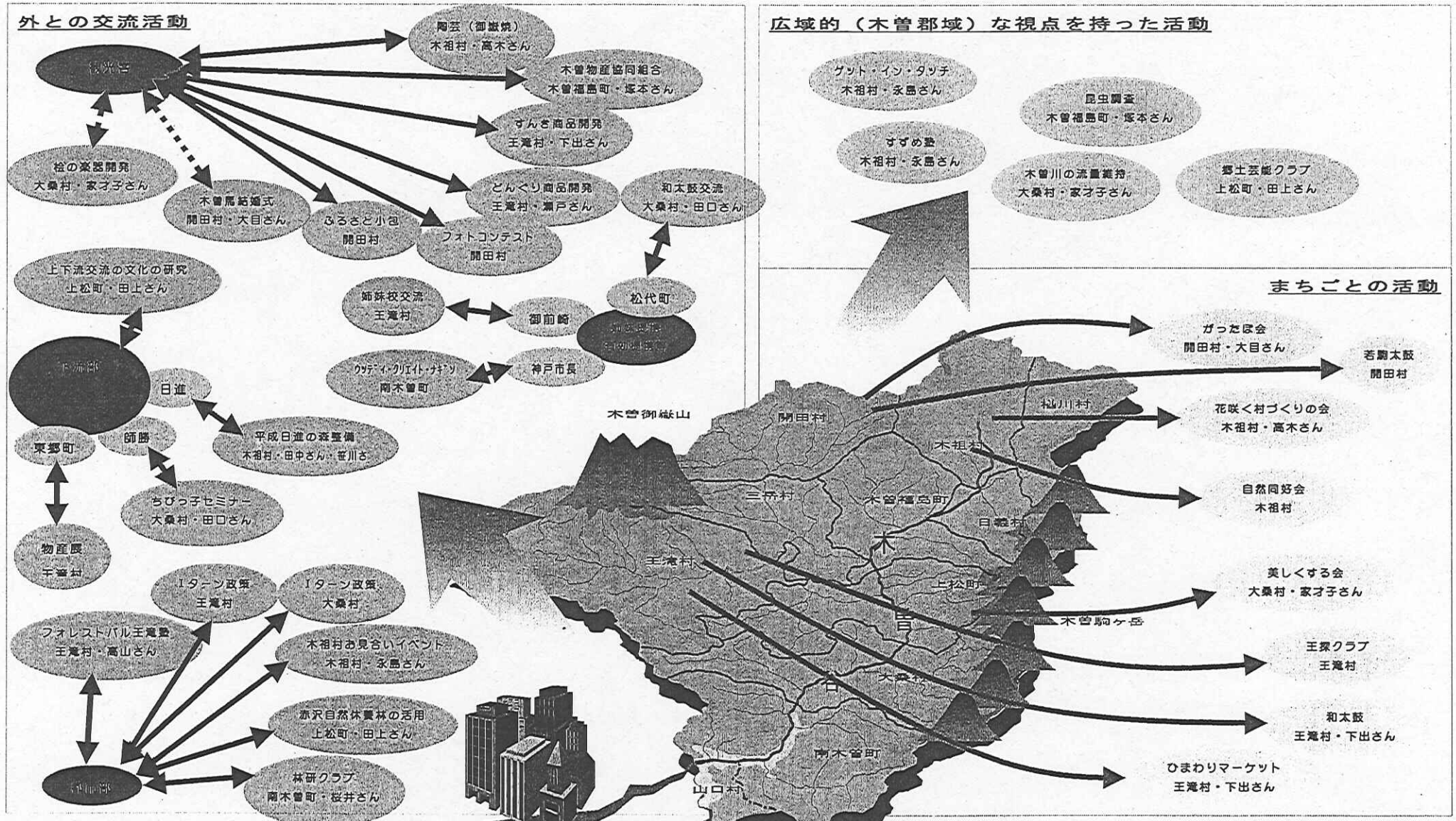
自然同好会（木祖村・田中さん）

- 木曽には保護しなければならないものがたくさんある⇒コマクサ、ヒメギフチョウ、ヤマトイワナ（乱獲される）等
- 同好会にはあらゆるエキスパートがいる。誰が来てもいろいろな説明ができる。
- 地元の人には当り前の自然でも、よそから来た人には魅力的。

王探クラブ（王滝村）

- 「王滝探索クラブ」（子供達のクラブ）…王滝塾、全村民含め、親、教育委員会も加わって活動を展開していく。

ヒアリング調査及び第１回懇談会を通じ、木曽郡の地域活動は“外に目を向けた活動”“広域に目を向けた活動”“地域に目を向けた活動”があることが確認された。



５－２．第２回懇談会

議論のポイント２…それぞれの立場から広域連携の必要性を議論する

第１回懇談会で紹介された各地域活動について、それぞれの活動がどの地域（自分達の町村、木曽郡、都市、下流）の人々を対象にしながら取り組まれているのかを整理し、それぞれの対象が違うことを確認した上で、広域連携の必要性について以下の視点から問題提起を行うとともに、共通テーマでの連携例を示し、議論を進めた。

- 個々の地域活動をより魅力的なものとするために広域で連携していく必要があるのではないか？
- 広域連携によって上下流交流、都市農村交流、観光振興の活性化が図れるのではないか？
- 地域ごとの活動についても広域的な視点を持つ必要があるのではないか？

議論の結果、木曽の活性化を考える視点として「小さな足元（各町村）、大きな足元（木曽郡）」というキーワードが参加メンバーより挙げられた。“小さな足元”を見直して、魅力を高めるとともに、“大きな足元”では「自然、健康、安心」や「木の文化」等、木曽郡共通のテーマで議論すべきという問題提起である。